



「少ない体験だけで、ボランティアのすべてを理解したよ

「ばあちゃん、元気だかね？」廊下の長いすに腰かけながら、誰かが話しかけてくれているのを待つおばあちゃんに声をかける。
「聞こえたかなあ」
ちよっとした不安を感じながら、そっと顔をのぞき込んだ。すると、「ああ元気だ。おまえさんはどうだね」と、せいといっぱいの笑顔で聞き返してくれた。
私は三年ほど前から、何回か「かんばらの里」という老人ホームで、寮母さんのお手伝いをしたり、お年寄りの方とお話をさせてもらったりしています。また、私は趣味で歌を歌っているのですが、福祉センターへ慰問に行ったり、敬老会などで歌わせてもらったりで、ボランティアについては理解しているつもりでした。
施設から帰ってきて、私がお年寄りの方と接したことを話すと、姉が私に、

「少ない体験だけで、ボランティアのすべてを理解したよ」とか、
「電話して取りに来てもらえば？」

今から四年前、私が小学校五年生だった年のある金曜日。
私が習い事から帰ると、両親が慌てながら言いました。
「病院、行くよ」
私は、理由もわからないまま、車に乗り込みました。そして病院に行く理由を聞くと、「おばあちゃんが今日、倒れたんだって」という答えが返ってきました。詳しいことはまだわからなかったけれど、一つ言えたことは、とても大きな不安が私たちを襲っていたということです。車の中の異様なほどの静けさが、そのことを感じさせ、今でもあの時の不安は忘れられません。
夜の九時ごろ、病院に着きました。人のいない、ひっそりとした病棟の一室に、たくさんの医療器械を取り付けられた、祖母の姿がありました。「今夜はやま」だと言われ、父と祖父が病院に泊まることになりました。できることなら、私も祖母のそばにいたかったのですが、翌日学校があったので、母と兄といっしょに家に帰りました。
どうにか「やま」を乗り越え、左半身が不自由になってしまったけれど、少しずつ、祖母は元気になっていきました。

ボランティアの心を大切に

植木利衣(第一中学校3年)

うに言っていた、そんなの、本当のボランティアじゃない」と言いました。
私の姉は高校生の時から老人ホームなどの施設に行つてボランティアをしており、今は社会福祉の専門学校に通っています。また、姉は口ぐせのように、
「ボランティアといっても人のためではなく、自分のためにやっているんだ」と言っていました。そこで私は、言葉のうへのボランティアではなく、本当のボランティアとはどんなことだろう、と思いました。
ところで、私の家のすぐそばには、脳コウクスの祖母と、最近すっかり年老いて弱ってしまった祖父が、二人で暮らしています。そのため、祖母の娘二人が毎日のようにおかしな屈けたり、様子を覗いたりしています。しかし、私はそんなごく簡単なことも手伝わず、いつも、
「私だって疲れてるんだから、お母さん届けよ」

などと言って、疲れている母や弱っている祖父母のことも考えず、ただ、母の言うことに逆らっていました。そんな毎日を過ごしていたある日です。
突然祖父が、頭を押さえて私の家に来てきたのです。
「痛い…痛い」
切なそうに声を上げる祖父を、私は見つめることしかできませんでした。
私は涙が出ました。悲しい気持ちと、後悔の涙でした。
「もつと早くから、祖父母に真心中で接してあげたべきだった。今、祖父の体が万が一のことがあれば、祖父の家は体の不自由な祖母だけになり、今まではずっと私中心の動きをとっていた母も、祖母の世話をしなればならなくなる。私の大好きな歌を歌うこともやめなければならぬ…」
今まで私がボランティアで歌いに行くと、祖父母や家族のことなんか、全く考えなかった。家族や祖父母に仕事をしてもいい、何一つ手伝おうとしなかった…。特に祖父に對

にしたいです。そこで私は、高齢者の人たちが、「長生きしてよかったな」と、心の底から思えるような社会にするために、少しでも、役に

立ちたいです。
そして、今までもったことのないこの考えを、私に教えてくれた母に、誰よりも感謝したいと思います。

新津市中学校少年の主張大会



少年の主張大会

8月11日、新津第三中学校を会場に少年の主張大会が行われました。12回目を迎えた今年の大会は、市内の各中学校から選出された14名が、身近な出来事や体験を通して感じたことをテーマに熱弁を振るいました。今号では、優秀賞の発表文をご紹介します。

なお、優秀賞の3名は三市中蒲原地区大会に出場しました。そこで植木さんは最優秀賞に輝き、県大会に進むことになりました。



市長賞

母から学んだこと

水沢麻子(第一中学校3年)

私は「ああ、よかった」と思い、普通にすごしていたけれど、この時から、母の苦勞が始まっていたのです。
母は、体の不自由な祖母の世話をするために、毎日毎日、病院に通っていました。しかも、まず我が家の家事を全て終わらせ、それから病院に行くのです。私なんか考えるよりも、ずっとずっと大変な仕事だったんだと思います。「もうやりたくない。なんでこんなことしなくちゃいけないの?」と、ぐちをこぼしても当然だったはずなのに、母は、ぐちもこぼさず、弱音も吐かず、しっかりと仕事をやりこなしていました。私もいつしよに病院に行き、母の手伝いをしたりしましたが、思ったよりずっと大変なもので、いつも一人で全部やっていた母を、とても尊敬し、改めて母の偉大さを、ひしひしと感じさせられました。
母にとつての祖母の看病は、去年の七月二十四日までの約三年間でした。最後の一年間、祖母は「植物人間」状態で、話すこともできず、何一言もないまま、そのまま、息を引き取りました。祖母は何も言えなかったけれど、きっと母に「今まで看病してくれて、本当にありがとう」と、心の中で言っていたのでは

ないかと思っています。
もし私が母の立場だったら、ここまでやるかどうか、あまり自信がありません。だからこそ余計、今まで気づくことのできなかった母の偉大さに、驚き、また「母のようになりたい」という憧れまでも抱くようになりました。
現在日本では、老人が増加し、子どもが減少する、いわゆる「高齢化社会」がすすんできています。これから先、今よりもこれがすすむことが予想されます。ということは、母のように、体の不自由な人の看病をしたりする人が、この先、今以上に増加することにも、つながると思います。
だから、これからの時代を生きていく私たちが、せめて自分の家族のことだけでも、責任をもって、看病してあげなくてはならないのではないのでしょうか。そして、いざという時に、自分のことだけでなく、他人のことも考えてあげ、手助けしてあげられるようにすることが、大切になつてくるのではないかと思います。
私は、自分の利益にこだわらず、他人に尽くせる大人になりたいです。口でいうのは、大それたけれど、実現するのは、かなり大変だと思います。